

第3章 3. 荘園と武士 c,地方の反乱と武士の成長

①9～10世紀、地方政治の乱れ

→[1 地方豪族]や[2 有力農民]の武装化

→政府は、反乱鎮圧のために中小貴族を[3 押領使][4 追捕使]に任命し、地方に派遣
→現地に残り[5 武士](兵)となる

②一族([6 家子])や従者([7 郎党])などを率い、闘争を繰り返し、国司にも対立。
上層農民から取り立てる

③[8 武士団]の形成=[9 土着国司]らを中心に武士の連合体が形成される。

④10世紀前半 [10 承平・天慶]の乱

[11 平将門]の乱=[12 下総]を根拠地に反乱、[13 国府]を攻め落とし東国を支配
[14 新皇]を名乗る…
→[15 平貞盛](桓武平氏)・藤原秀郷に鎮圧される。

[16 藤原純友]の乱=[17 瀬戸内海]の[18 海賊]を率いて反乱→国府や大宰府を攻撃
→[19 源経基](清和源氏の祖)に鎮圧される。

⑤朝廷や貴族は、武士の[20 軍事力]を利用→[21 侍]として奉仕させる
宮中の警備([22 滝口の武士])、国衙の軍事力([23 館侍][24 国侍]
[25 押領使][26 追捕使]などに任命

9世紀末から10世紀、地方豪族や有力農民は勢力を維持・拡大するために武装、各地で紛争が発生した。その鎮圧のために政府から押領使・[27 追捕使]に任じられた中・下級貴族のなかには、そのまま
在庁官人などになって現地に残り、有力な武士(兵)となるものがあられた。

彼らは、一族([28 家子])、従者([29 郎党])をひきいて闘争をくり返した。これらの武士たちは
しだいに任期終了後も任地に残った[30 国司]の子孫などを中心に武士団を形成しはじめた。

こうしたなか、下総を根拠地とした[31 平将門]は、939年に反乱をおこし、東国の大半を占領、[32 新皇]と自称したが、同じ東国の武士の[33 平貞盛]や藤原秀郷らによって討たれた。また、もと伊予の国司の[34 藤原純友]も[35 瀬戸内海]の海賊をひきいて反乱をおこし、[36 源経基]ら討たれた。この二つの乱は、時の年号から[37 承平・天慶]の乱ともよばれる。

地方武士の実力を知った朝廷や貴族たちは、彼らを[38 侍]として奉仕させ、9世紀末に設けられた
[39 滝口の武士]のように宮中の警備に用いたり、貴族の身辺や都の市中警護にあたらせたりした。また
地方でも[40 追捕使]や押領使に任命して、治安維持を分担させることもさかんになった。

e. 源氏の進出

①10世紀前半 承平・天慶の乱 平将門の乱→平貞盛([41 桓武平氏])・藤原秀郷らが鎮圧
藤原純友の乱→源経基([42 清和源氏])らが鎮圧

②武士団の成長 開発領主ら地方の武士団として成長→[43 土着貴族]の郎等や在庁官人に

③[45 武家](軍事貴族)…地方武士団を組織化([46 清和源氏]と[47 桓武平氏])

清和源氏…[48 源経基]が祖。摂津を拠点に[49 摂関家]に接近、その保護を受ける
源満仲→頼信・頼光兄弟

桓武平氏…古くから[50 東国]に根を下ろす。→のち伊勢・伊賀、瀬戸内など西国に
平貞盛→正盛ら

④11世紀前半 [51 平忠常]の乱(関東・房総半島)
→[52 源頼信]が鎮圧→以後、[53 清和源氏]が関東への影響力拡大

⑤11世紀中期 [54 前九年]合戦
→[55 安倍]氏の反乱を[56 源頼義]・義家らが[57 清原]氏の力を借り鎮圧
頼信の子 出羽が本拠

⑥11世紀後半 [58 後三年]合戦の役
→[59 源義家]が、[60 藤原清衡]の力を借り[61 清原]氏の内紛を鎮圧

⑦こうした過程で[62 清和源氏]が東国を中心に武家の[63 棟梁]としての地位を高める。

桓武平氏→中央の権門と結び、[64 西国]や伊賀・伊勢を拠点に勢力を伸ばす

⑧以後、奥州では[65 平泉]を拠点とする[66 (奥州)藤原]氏が有力となる。
(清衡・基衡・[67 秀衡]三代、100年)
平泉文化…奥州に産する[68 黄金]の力を背景に[69 中尊]寺、毛越寺などを建立
→大陸との交易なども行われる。

11世紀になると、開発領主たちは私領の拡大と保護を求めて、土着した貴族に従属し、[70 郎党]
となったり、[71 在庁官人]になつたりして地方武士団として成長していった。とくに中央貴族の血筋を引
く[72 桓武平]氏や[73 清和源]氏は、地方武士団を広く組織して武家(軍事貴族)を形成し、大き
な勢力をきざくようになった。

なかでも摂津に土着していた[74 清和源氏]の源経基らは摂関家に近づいて、棟梁としての勢威を
高めた。とくに1028年源[75 頼信]が上総で発生した[76 平忠常]の乱を鎮圧、源氏の[77 東国
]進出のきっかけをつくった。また、源頼義は陸奥守なり、陸奥で強大な勢力を持っていた[78 阿倍]
氏とたたかい、清原氏らの援助をうけ、これを破った。([79 前九年合戦])。さらに、頼義の子[80 義
家]は、[81 清原]氏一族の内紛に介入し、藤原(清原)[82 清衡]をたすけて内紛を平定した
([83 後三年合戦])。こののち奥羽地方では清衡の子孫が[84 平泉]を拠点に支配を続けるが、
一方でこれらの戦いを通じて源氏は東国武士団との主従関係を強め、[85 武家の棟梁]としての地位
を固めていった。